

酒と涙と恋心

今日も一日疲れたな、今日は畑仕事も頑張ったし、何より稽古が大変だったもんなと思
いながら、天地は布団に入った。

(最近、弛んでどるとか言っつて、じっちゃん卑怯な技ばかり使うんだもんな。あれじゃ、
避けきれないよな)

そう思った途端、欠伸が出た。

(明日も朝稽古とか言っつてたよな。明日に備えて寝よう)

天地は肩まで布団に潜り込むと、目を瞑って寝る体勢に入った。すると…

「ドサツ！」

「いてっ」

天地の身体の上に何か重いものが落ちて来た。

「な、なんだよ！」

驚いた天地が身体を起こすと、それは天地の布団の上でクネクネと動いた。動物か？と思
つて、よく見て見ると…酔っばらった魍呼だった。

「魍呼！何だよ、いきなり！」

「あーてんちいらー」

どうやら呂律が回らないほど酔っばらっているらしい。

「天地だーじゃないだろう、ほら、起きろって…」

天地が魍呼の身体を起こそうとすると、ぐにやりと魍呼は背中を反らせ、危うくベッドか
ら天地共々落ちるところだった。

「こら、何、ふざけてんだよ」

「あははーてんちおこったー」

「良いから、ほら、起きて、お前の部屋で寝ろって」

天地は魍呼の身体を支えると、立ち上がるうとした。

(どうしようもないな、全く。こんなに酔っばらって)

ここまで魍呼が酔って居るのも珍しい。ほとほと困りながら、天地は魍呼をどうにか移動
させようとした。だが、思いもよらぬ強い力で、魍呼が天地の服を掴んで引っぱった。

「うわっ」

急に引っぱられて天地は体勢を崩し、自分のベッドの上に仰向けになった。

「ここねるー」

魍呼が天地の上に重なって来た。

(重い…それに、酒臭い…)

魍呼の身体から酒の匂いがし、鼻をつく。天地は顔を逸らしながら、

「おい、魍呼、重いよ。どいてくれよ。此处で寝られると困るよ」

必死に言っつてみた。だが、当の魍呼は半分寝ているのか、ぼそぼそと嫌だよ、どかないと

言って動かない。

「魍呼、頼むから」

「じゃあ、キスして天地い」

「は？」

「キスしてくれたらどいてやるよ」

天地は思わず、魍呼の顔を覗き込んだ。魍呼がニヤリと笑っているかと思ったら、魍呼はまだ天地の身体に顔を埋めていた。

「…冗談、言うなよ」

「冗談なんか言ってないよ」

「酔ってるだろう、お前」

「酔ってなきゃ、キスしてくれるのかよ」

天地は困り果てて天井を見つめた。酒の匂いが部屋に充満する。

「もう寝ろよ…」

仕方なく、天地はそう呟いた。魍呼はもぞもぞ動くと、手を伸ばして天地の首をぎゅっと抱きしめて来た。酒の匂いと共に、魍呼がいつも使っているシャンプーの匂いがした。

「天地はいつもそう言って誤魔化す。ずるいよ」

「ずるい？」

「あたしには何にも手を出してくれない。あたしにはなーんにもだ」

先刻まで呂律が回ってなかった人物とは思えないほど、魍呼ははつきり喋っていた。魍呼の声が部屋にぼわんと浮いて消えた。

「…人聞き悪いじゃないか、魍呼以外の人にも手を出してないよ」

返事になってないなと思いつつ、天地は言ってみた。魍呼の顔が傍にあってドキドキした。

「その方が良かった。他の女に手を出してくれていた方が、ハッキリとお前の気持ちの方が分かって諦めがつくもの…。なあ天地…」

「ん？」

「あたし、そんなに魅力が無いか。あたしの事、嫌いか？」

泣いているのか、魍呼の声がさらにくぐもった。天地は魍呼の顔を見たいと思ったが、必死に抱きつく魍呼は全く動かなかった。

「嫌いじゃないよ」

「じゃあ、好き？」

「…」

「あたしだって、いつまでも待ってらんないよ」

「…魍呼…」

「あたしだって、いつまでもずっと此処で待ってられないよ。なあ、あたしが出て行ったからお前困る？」

この瞬間、天地はハツとして魍呼の身体を自分の身体から引き離し、魍呼の顔を見つめ

た。だが、ふざけた魍呼が天地の袖を引っ張り、天地のベッドに仰向けに倒れたので、今度は天地が魍呼の上に被さった。魍呼の目は真剣に天地を見つめていた。その顔はもう酔っ払いではなかった。

「あたしが居なくなったら、淋しく思ってくれる？」

「…何処か行くのか？」

「どっか行ったら、お前、あたしを思い出してくれる？」

天地が魍呼の顔を見つめていると、魍呼がふふっと笑った。一筋の涙が魍呼の目から零れて耳もとへ流れて行った。

「天地、あたし、お前が大好きなんだよ」

「魍呼…」

「少しは淋しがってけると良いのに…」

魍呼が手を伸ばして抱きついてくる。天地はそのまま魍呼に抱き締められる格好となった。天地の耳もとに魍呼の呼吸と鼓動が聞こえて来る。

「あったかいな、天地」

魍呼は天地の首筋に身体を埋め、暫くそうしていた。

「魍呼…」

「すぐ止めるから、あとちょっとだけ…」

時間が止まった気がした。夜の闇の中、魍呼と二人だけが存在しているようだった。

「天地…今日だけ、今日だけ此処で寝て良い？」

離れがたくなったのだろう、魍呼が切なく言った。天地は自分の心もいつしか切ない気持ちになっている事に気付いた。

（魍呼が出て行ったら…俺は…）

先日、魍呼がなかなか帰って来なかった時の事を思い出した。もう帰って来ないのでないかと思ったら、心配で不安で一日時計ばかり見ていた。

（美星さんにはバレていて、魍呼なら絶対に帰って来るって言って貰ったんだっけ…）

天地は目を瞑り、そっと魍呼の背中に手を回した。

「今日…ただぞ」

「…うん…」

魍呼は天地の隣に横になると、天地の予想に反して、素直に目を閉じた。天地はその顔を見つめると自分も目を閉じた。

「天地、」

魍呼が声を掛けて来たので、天地は目を開け、魍呼を見たが、魍呼はそのまま目を閉じている。

「なに？」

「ごめんな…あたし、どうして良いか分かんなくなっちゃった」

「魍呼…」

天地は布団の中を探り、魍呼の手を見つけると、その手を握ってやった。ぎゅっと魍呼も天地の手を握り返して来た。

「ごめん、俺も、悪かった…」

「お前は悪くないよ」

「でも…」

「お前は悪くない。悪いのは、あたしだよ。ぜーんぶあたしだ。あたしが勝手に好きになっただけよ、お前を困らせているだけさ」

魍呼の言葉に何と返事をしたら良いか分からず、天地は天井を見つめた。月の光が、カーテンの隙間から差し込む。

「俺、お前の事、嫌いじゃないよ。でも、今すぐに返事は出してやれない。魍呼…」

「うん」

「けど、俺、お前が居なくなったら淋しいよ。多分、毎日思い出すと思う」

「ふふ、嘘でも嬉しいぜ」

強張っていた魍呼の身体が、解けた気がした。

「嘘じゃないよ…嘘じゃない」

天地は魍呼の手を強く握った。

「もう少し、そっちへ行つて良い？」

珍しく素直な魍呼が天地を見て微笑んだ。

「良いよ…」

その顔を見ていたら何だか淋しくなつて、天地は魍呼を引き寄せた。

「あつたかいな、魍呼」

本当はドキドキした。魍呼の鼓動、その体温に触れて心臓が今にも口から飛び出しそうだった。でも、傍に魍呼が居るといふ安心感が天地を包み込んだ。

「おやすみ、天地」

「うん…おやすみ…」

本当は、こういう曖昧な事はいけない、魍呼とこんなふうに抱き合ってしまったら…と天地は自分に言い聞かせたが、いつしか天地はその温もりに引かれ眠りの世界へ落ちて行った。

翌朝、天地が目を覚ますと、魍呼は隣に居なかった。

「魍呼？」

(もしかして、本当に出て行っちゃまったのか?)

ガバリと天地は起き上った。部屋を見渡す。すると、窓際に魍呼は立っていた。天地と目が合うと、ふふっと笑った。その顔は、いつもの魍呼の顔に戻って居た。

「昨日はすまなかったな、天地」

天地の傍までくると、魍呼は天地に抱きつき、その頬に派手にキスをした。

「…良かった、出て行ってなかった…」

思わず天地は呟いた。

「あたしが出て行くと思ってたんのかい？」

「だって、お前、昨日…」

「行かねえよ。行くなんて一言も言っていないだろ？」

「え…」

天地は呆気に取られ、呆然と魍呼の顔を眺めた。魍呼はフツと笑うと、天地の耳もとに顔を近づけ、

「それにあたしが出て行ったら、天地、淋しがるもんな…」

そっと囁いた。

「なっ…！」

耳まで赤くなった天地の顔を満足そうに見ると、魍呼は機嫌良さそうに微笑んで、

「じゃ、朝風呂行ってくるぜ。お前も来るか？」

とからかった。

「行かないよ」

「だよな。じゃあな」

魍呼が姿を消すと、天地は何だか狐につままれたかのような様だった。

(なんだよ、あいつ。散々、泣いたりなんざり言って…)

心の中で文句を言っても、昨晚の切なそうな魍呼の顔が浮かんで、天地の胸を締め付けた。

(ま、良いか。出て行かないって言ってたし…俺も悪いんだし…)

天地は、魍呼が口づけた頬をそっと押さえると、うーんと伸びをした。そして、カーテンを開けると窓を開け、新しい一日を照らす朝日を身体いっぱい浴びたのだった。